

オリゲネスの「意志」理解に関する一考察

梶原直美

The Study on Origen's Understanding of "Will"

Naomi Kajihara

抄 録

すべての人間には内的に「意志」が与えられ、それは様々な形で外的に表現される。その最も顕著な形態が「行為」ないしは「行動」であろう。われわれはしばしば自らの行動の主体として矛盾を抱え、パウロの言うように「自分の望むことは実行せず、かえって憎んでいることをする」¹ものである。その点において、ギリシャ教父オリゲネスは、彼の生涯をして、彼の意志についての関心をわれわれに抱かせる。優れた知的探求者、篤い信仰者、熱心な教育者、そして真実を守ろうとするキリスト者であり神学者であった彼には、教育と信仰に熱心な両親という恵まれた幼少時の外的状況も存在したが、彼自身の生涯を貫いた主体的な姿勢は彼自身から生じたものにほかならない。

われわれはここで、「意志」に対する彼の認識と、それが彼自身に及ぼした影響を、彼の著したテキストに基づいて考察する。

キーワード：オリゲネス、意志、理性、魂、精神

(2002年9月12日 受理)

Abstract

We all have our own "will" inside and express it outward. It is "deed" or "act" that is most remarkable phenomenon. We have sometimes inconsistency when we deed, as Paulus says: I do not do what I want, but I do the very thing I hate. The life of a greek churchfather, Origen, interests us in his will. He had for certain fortunate circumstances as a boy, i.e. his parents who were eager in education and christianity. But the autonomic life is based on his own will.

This paper discuss Origen's understanding of "will" and its influence on him.

Key words : Origen, Will, Reason, Psyche, Nous

(Received September 12, 2002)

序

オリゲネスは、とくにその後のキリスト教教理や神学者たちにも多大な影響を及ぼしたギリシャ教父としてよく知られている。彼の神学体系は、たとえば『諸原理について』²において垣間見ることができる。³ 彼自身は厳密な神学者、熱心な教会指導者、またそれ以前に、神の意思を求め、その実現を願い、祈る、敬虔なキリスト者であった。そこには、理想に留まらず、実践者として歩むオリゲネスの姿が際立っている。彼は、人間としての意志を持ち、それによって行為した。われわれは、彼の生涯の歩みを辿るとき、その歩みの確かさに驚嘆する。彼にこのような歩みをもたらしている最終的な要素は、彼の「意志」であった。

オリゲネスのみならず、人間には意志が備わり、自らの行動を決定することができる。しかしわれわれは意志を持ちながらも、しばしばその弱さに無力な存在ではないだろうか。ゆえに、オリゲネスに関して、彼自身の持つ「意志」の理解を探求することは極めて有意義なことと言えよう。

それにもかかわらず、オリゲネスの意志理解に関してはこれまで目立った研究はなされておらず、関連する殆どの研究が、彼の自由意志や、オリゲネスの全般的な研究書のなかであるいは人格にアプローチするさいに意志にふれられる程度のものであった。

本稿は、オリゲネスが彼の生涯を通じて人間の「意志」をいかにとらえ、それにいかなる力を見出していたのかについて、彼の著作をもとに、考察する。考察に当たっては、前述の『諸原理について』をおもに用い、従来の研究に照らし合わせながら内容の分析を試みる。

1

オリゲネスは四巻から成る『諸原理について』のなかで、おもに神、世界、自由、聖書というテーマに関して考察し、キリスト教の立場から、それらに関する彼自身による理解を明示している。その目的は、教義の体系化や固定化ないしは絶対化にあるのではなく、キリスト教を当時の思想にみられた非キリスト教的な考え方から区別してキリスト者にそれを提示するためであった。⁴

たとえば、オリゲネスによると、意志に関する「異端者」⁵ たちの見解のひとつは以下のような内容として理解されていた。すなわち、人間の救いは自分自身、あるいはその行為ではなく、各々の魂の本性によって決定される。そしてここで言う本性とは、たとえば善や悪という性質であり、それらは変化しない。⁶ オリゲネスはこのような宿命論的な考え方を反駁する。ゆえに、この書の内容は、いわば実際の場における課題へむけての、オリゲネスの応答としての神学理解であったと言える。彼は、合理的な論理の展開を目指したのではなく、現実人間が生きるなかに応答しようとした。ただし、オリゲネスは論理的考察を軽視したのではない。むしろ最大限にそれを重視し、そのことは、「明白な説得力のある論述をもって一つ一つの点に関して真理を探求し、例証並びに論証によって、

上述した如く統一的体系を作らねばならない。その例証並びに論証の一部は聖書の中に見いだされ、他の一部は論理正しい探求と精緻な思考によって見出されるのである。』⁷ という彼の記述によって明白である。その意味において、彼の提示した神学は、優れた論理的根拠を有するとともに、かつ彼自身の生涯や生き方と密接に結びついていたと評価するに十分なものであると言える。

彼の「意志」に関する考え方を理解するにあたって、『諸原理について』第三卷第一章が考察の対象となり得る多くの内容を提示している。ここにおいてオリゲネスは、意志 (*arbitrium voluntas*) の本性を明示しようとした。

その説明は、外的力への依存のあり方によって展開されている。⁸ つまり、動きの原因が外的要因に依存するもの、内的要因に依存するもの、そしてその中間に位置するものが挙げられる。ここから、外的力のみ依存するもの、内的力に依存するが自動的に (*ex se*) 動くもの⁹、内的力に依存し、自律的に (*a se*) 動くもの¹⁰ と分類されている。そして後者の自律性は何かの動きへと刺激する想念 (*fantasia*) 即ち意志や刺激 (*incitamentum*) が生じるときであると説明されている。想念つまり意志や感情 (*sensus*) は、本能 (*naturalis*) によって秩序正しい適当な動きへと駆りたてる。人間はこのような「自然の動き」を自らのうちに有するが、他の生物には付与されていない「理性の力」 (*rationis vis*) をも有するがゆえに、「自然の動き」について判断し、判別し、ある動きを制止し、また別の動きを受け入れることができる。

人間はここで「理性」を付与された「理性的存在者」と呼ばれ、「人間の中にあるこの理性は、本性上善悪を識別する能力を有しており、それを判別したとき、承認したことを選ぶ能力¹¹をも持っている。』¹² ものと説明されている。

このような性質をとおして、オリゲネスは、自己をとりまく外的環境との関わりをなかで人間の行動を以下のように分析する。つまり、外的環境の存在は、自分自身にその根拠があるのではないゆえ、人間がいかにそれと関わる状況に置かれようが、外的環境そのものからの影響力を遮断することは不可能である。しかし実際に影響されるか否か、またいかに反応するかは、自らに掛かっている。このさいの判断や承認は理性によるものであり、人間は理性の判断 (*rationis iudicio*) によって外部からの刺激を用い、理性の意 (*nutus*) によって行動化するのである。つまり、行動のためには、精神 (*animus*)¹³ の承認と精神 (*mens*) の意の存在が必要であり、さらに理性の判断によって行動が決定される。オリゲネスは次のように述べている。

「それで、以上のことは、いはば自然的経験によって確認され得るのであるから、外部からはいったものをわれわれの行為の原因とみなし、われわれ自身のうちに原因があるはずのものがわれわれに責任のないことであるとするのは、当を逸していると当然言えるのではなからうか。』¹⁴

「外部から〔人間に〕はいる刺激はわれわれ自身にかかっていないが、〔外部から〕はいった刺激をどのように利用すべきかを、われわれのうちにある理性が識別し、判断するのに応じて、それを良く用いるかそれとも悪く用いるかということは、われわれ自身にかかっているのである。」¹⁵

「われわれは意思の能力を神から受けているが、あるいは良い願望に、あるいは悪い願望に向かうように、この意思を用いるのはわれわれである。」¹⁶

オリゲネスは、それをさらに聖書箇所引用によって説明している。ここでわれわれが確認し得るのは、彼の、人間の理性への信頼であり、理由の如何にかかわらず、自らの行動の責任の所在は自らの内部にのみ存するという彼の考えである。オリゲネスは聖書から¹⁷、「命じられたことを守り得る能力がわれわれのうちにあり、そのために守りうることをなおざりにするなら、当然『裁きを受けなければならない』」¹⁸とも述べている。以上の叙述から、オリゲネスは人間を、意志し、行動する主体として強く意識していることが明白となる。この意味において、人間に与えられた責任もまた究めて重大なものであると言える。

また、オリゲネスは、罪の原因についても全く魂の自由意志に拠るものと考ええる。¹⁹ 悪魔が人間の罪の起源ではない。罪はアダムから単に遺伝するものではなく、個々の魂の自由意志に依存するものなのである。

以上の内容を含めて、オリゲネスの自由意志論はストア派のそれ「ト・エフ・ヘーミン」に殆ど一致しているということが指摘されるが、その一方で単にストアの学説ではないということにもまた言及されねばならない。²⁰

オリゲネスは、これまでも指摘されてきたように、ストア派や中期プラトン主義的な考え方をを用いて思想を展開している。哲学の方法論は、確かに彼の思考法のなかに取り入れられていた。しかしそのようにして人間存在を理解するさい、オリゲネスが独自に加えざるを得なかった考え方がある。そのひとつは、人格的存在者としての神認識であり、これはまさに彼がキリスト教思想家であるところの重要な一面であると言えよう。また、不完全なものとしての人間、つまり中間的なものとしての人間の理解である。人間が完全でない限り、すべてが論理的に把握され得るわけではなく、そこには諸々の非論理的な矛盾が混在するのである。

チャドウィクは、オリゲネスがストア派の思想を援用し、外的な力に束縛されないものに自己の願望を限定すべきである、という見解を受け入れるに吝かではないが、魂がそれ自体で道徳的不変性という本来の資質をもつとは考えず、むしろ、そのもろさと弱さをはるかに深く自覚していたことを指摘する。そしてさらに、この魂の「可変性」は、恩寵によって神と合一せられる時にはじめて克服されるものであるとの見解に到っている。²¹ また、この可変性は、魂の運動として次のように表現されている。

「…魂は常に自由意志を有しており、自由意志は常に、あるいは善、あるいは悪の方へ動くものであって、理性的な者即ち・精神・魂は、あるいは善なる動き、あるいは悪なる動きなしには存在し得ない…。」²²

2

このようにみると、人間にとって自らが背負うべき責任は極めて重く、絶えず罪の危険性に戦慄を覚えながら緊張して生きていかねばならないとの印象さえ受ける。しかし、以上は人間の側に開かれている「可能性」であり、与えられている「能力」についてまず述べられたのだと考えることができる。なぜなら、オリゲネスは、意志する主体、行為する主体は人間にほかならないが、しかしまたそこには同時に、神の助けが不可欠であることも別の箇所述べているからである。オリゲネスは以下のように述べている。

「われわれの自由意志にかかっていることが、神の助けなしに為し遂げられようと考へてはならないし、神のみ手の果たすことが、われわれの行動、努力、意図を伴わないで成遂げられるとも考へてはならない。」²³

「善業をなすにあたって、人間側の意図はそれ自体として、善を完遂するには不十分である——神からの助けによって完全へと導かれるので——ように、悪の場合にも、われわれの自然の働きからわれわれが罪の出発点となるもの、いわば罪の種のようなものを受けているのは、正しい倫理に従って主張すべき明白なことである。」²⁴

そして、オリゲネスは人間の持つ弱さも認識しており、善い行いをなすにあたって、人間側の意図はそれ自体として、善を完遂するには不十分であり²⁵、人間は神から試みを受けるが、誘惑される者が必ずしも誘惑に打ち勝つと考へるべきでない²⁶と警告する。

「つまり、神はわれわれが耐えることができる能力を授けてくださる。しかし、神がわれわれに与えてくださったこの能力を懸命に働かせるか、無気力にしか働かせないかはわれわれにかかっている。」²⁷

「理性的な諸被造物は自由意志の能力を与えられていたので、その意志の自由が各々を、あるいは神を模倣することによって進歩させ、あるいは怠惰によって後退させたのである。既に述べたように、これが理性的被造物間の相違の原因となった。したがって、その相違の源は創造主の意思でも決定でもなく、各自の自由な決断にある。」²⁸

ここにおいては、自由意志の能力について言及されている。以上の論述から、オリゲネスが伝えようとしたのは、人間にすでに与えられている能力と、それゆえに担っている責

任、そしてその根底に不可欠なものとして理解されている神の存在と助力であったと言える。

この不完全な人間である理性的存在者はみなその魂に自由意志を有し、ゆえに、その「努力によって」完全性に向かって進み得る「可能性」がある。神の意志は、訓練と教育によって彼らを救うことにある。²⁹

ここで言われている「能力」は、ひとつには理性の持つ力である。理性によって善悪の識別と選択が可能となるということである。またもうひとつには自由意志の持つ力である。人間には理性があり自由意志もある、ただし、その能力の現れ方には多様性がある。理性や意志はそれぞれのもので独立して機能するわけではなく、人間の内部で互いに複雑に影響し合いながら力を発揮していく。人間が生きるためには、この能力が何らかのかたちで意志され、行為と結びつかなければならない。

人間は理性と意志とによって行動し得る。有賀は、「人間が神の前に責任を感じ、善を選び悪を去らんとする努力を為し得ないものであったとしたら、万有の父としての神観も成立たず、また人が神に祈る祈祷の生活も不可能となる」と述べている。³⁰ しかしここに、「神の知識」がさらに必要であることについてもふれている。³¹これに関してはチャドウィックも「神だけが他に由来せず、単一者であり、すべての多様性を超越し、自己充足的で、特別の恩寵に助けられなければ、人間の知力でとらえることができない。」³²と、人間の知力の不十分さを指摘している。

神との関係の中で、オリゲネスは人間をこのように捕え、そこにこそ「祈る」ことの意義を見出している。これに関しては後述する。

3

ここにおいて、オリゲネスが用いている「魂」、「精神」、「理性」という用語の意味するところを確認したい。オリゲネスはそれらをいかに関連付けていたのだろうか。

魂と精神に関する理解について、オリゲネスは明らかな区別をもって認識している。彼は、まず精神が先在していたことを前提とする。これは明らかにプラトン主義の考えであるが、精神は単なるアイデアとしての存在ではなく、人格および意志を持つものとして理解されている。³³すなわち、神は存在それぞれに意志の自由 (*arbitrium liberum; libertas voluntatis*) を付与された。自由意志を与えられた理性的存在は、しかし、その自由によって冷え、墮落した。精神 (ヌース) が冷めて魂 (プシュケー) となった³⁴ というオリゲネスの理解は、オリゲネスの神学を特徴付けるうえではよく知られるところである。このさい、魂は、精神または霊 (pneuma) よりも下階層に位置し、この意味では精神と肉体の中間にあるものであると考えられている。³⁵

この人間の魂は、前世において罪を犯し、その影響が現世に及んでいる。³⁶オリゲネスによれば、現世の生活は前世に犯した罪の結果であって、それを潔めるための訓練なのである。その罪の原因は、自由意志に帰せられる。

しかし、プシュケーは本質的にヌースと関係しているため、魂は如何に墮落しようとも、

理性的性質を失ってしまうことはない。³⁷ また、墮落によって自由意志が失われることもなく、変化は、これによって精神であったものが魂の状態へと下降したことであり、人間はここに体³⁸を与えられた。この世に存在する人間は、この魂が体をまとったものとして理解される。冷えた精神である魂が、再び完全なものとなるまで教育されるために、体を与えられてこの世に送られたのである。³⁹ ゆえに、魂というものはすべて不完全な精神を意味する。

なお、チャドウィックは、オリゲネスが、すでにフィロンやクレメンスが用いた、肉体と魂から成る人間と言う類比概念を持ち出し、これを肉体・魂・霊というパウロによる人間の三分割にならって修正しているだけであると述べ⁴⁰、オリゲネスにとってパウロの三分割法は、暗に魂が物質と霊の間にあることをほのめかすものに過ぎなかったことを指摘する。⁴¹ ただ、この自由意志に関するオリゲネスの叙述を見るかぎりにおいては、「霊」という概念はあまり用いられていない。それ以上に、精神と魂の状態の違いと魂の能力が強調されている。ここからも、現実生きる人間に自らの魂の状態を自覚させ、すでに所与された能力を伝え、主体性を促すことに、彼の関心があったことが確認される。

ここで、キリストの魂について考えてみたい。キリストは人間と同じ体を取られた。それによって、彼の神性は物理的な体へと限定された。⁴² オリゲネスは以下のように述べている

「…神の子は…人間の体をとっただけでなく、魂をも取ったのである。その魂は…意志と徳の点では神の子に似ているものであった。…あらゆる魂の中でただひとり罪を犯し得ないものであった。」⁴³

つまり、キリストは人間と同じ魂という内面を付与されたにも関わらず、罪を犯し得ない唯一の例外だったのである。オリゲネスは、キリストの存在について、「神の子への参与によって人は神の子らの一人とされ…聖霊への参与によって人は聖なる者、霊的なものとされる」⁴⁴と述べている。

オリゲネスは確かに神認識を重視し、そこに知識（グノーシス）の必要性を説く。しかし、それは知性だけの成長に関わる知識ではなく、神の御言（ロゴス）を源泉とする知識を重視しているのである。⁴⁵ ロゴスとしてのキリストは、体と魂を与えられた人間の人格をもって、神と人間との間に介在し得る。福音書に記されているように、彼は喜び、悲しみ、苦悩し、そして受け入れる。これがキリストの魂の状態であり、その魂において生じた意志の結果としての行為である。

オリゲネスはまた、人間に備わっている「神の像」という性質からも考察する。

「事実、人間のうちに神の像の刻印が明らかに認知される。…人間の場合には漸次、ひとつひとつ修得される…。」⁴⁶

有賀は、人間にまず神の像が与えられ、これによって神の相似性の可能性が約束されたのであり、終わりの日には自らの努力によってそれを完成すべきものであるとの考えをオリゲネスのなかに見出している。⁴⁷ 人間には漠然とした自己の在り方ではなく、原形が与えられており、その具体性を、キリストはわれわれに提供する。

結

われわれは、オリゲネスの「意志」をめぐって考察を進めてきた。そのなかで、人間は存在する主体としての在り方が問われ、罪を負い弱い存在でありながらも、与えられている能力のゆえに、決して責任から逃れられないという彼の考えが明らかとなった。しかしその一方で、だからこそロゴスとしてのキリストの存在が意味を持ち、彼において神の意思を教えられることによって、逆に、われわれが意志するもの、選択するものを示され、そこに意味を与えるものという点に、オリゲネスの考えの一面を言い表すことができるのではないか。

かつてギリシャ哲学で、隔絶した神と人間との関係に接点をもたらしものとしてロゴス概念が用いられたが、オリゲネスにおいては完全な「神の像」を内包するキリストが唯一のロゴスである。この、キリストをロゴスとする考えには、不完全な人間が完全な神とは決して合一し得ないという閉鎖された循環を断ち切り、新たな道が示唆される。人間は優れた能力をもってしても独力では神を知り得ない。しかし、キリストによるグノーシスを得ることによって、それが可能ならしめられる。神への知、グノーシスは、この世の知識と矛盾し、対立する。ゆえに、そこにしか得られないのである。それをキリストは提示する。

オリゲネスはここに祈りの必要を説く。願い、求める祈りを、キリストを知ることによって神にささげる。人間は、善であり存在そのものであり人間が回復されるべき姿をそこに見出す。祈りということを読み起こすとき、オリゲネスが強調していた神の助力に新たに気付かされる。すなわち、キリストがわれわれとともにわれわれのために祈られるという彼の叙述である。⁴⁸

人間の意志は、本来のもの、つまり自らにとって最も自然であるところのものを願い求めることによって力を得、意志するところのものとなる。オリゲネスが意志を論じるにあたって、単に「意志」でなく「自由意志」として考察しているのは、読み手に自由意志への覚醒を促すとともに、自由意志という在り方が、彼にとっては最も自然な意志の状態であったためかもしれない。

注

本論文において、オリゲネスの著作については以下の略記を用い、聖書の引用表記は MLA による略記に従った。

『祈りについて』：PE

『ローマの信徒への手紙注解』：ComRom

『諸原理について』：PA

『ヨハネによる福音注解』：ComJn

- 1 Rom 7, 15.
- 2 本論文では、Görgemanns, H. -Karpp, H. hrsg., *Origenes, Vier Bücher von den Prinzipien, Texte zur Forschung*, Darmschadt 1976. (以後、Görgemanns-Karpp と略記し、頁数と行数、および彼らによって付された原典の頁数と行数を記載し、ギリシャ語とラテン語双方が記されている頁に関しては、ギリシャ語、ラテン語の順に「/」で区切って行数を記す) を底本として用いた。邦訳には、小高毅訳『諸原理について』(キリスト教古典叢書12)、創文社 1978年、を参照し、本文中に引用する邦訳もこれに従った。
- 3 たとえば H. チャドウィックは、『諸原理について』を、完成した教義の体系としてはとらえず、試論的作品とみなしている。しかしここにおいて、ギリシャ思想を援用しながら神認識や被造世界の認識を目指すオリゲネスの思想の特徴が提示されている。H. チャドウィック著、中村・井谷共訳『初期キリスト教とギリシャ思想 ユスティノス、クレメンス、オーリゲネース研究』、日本基督教団出版局 1983年 (Chadwick, H., *Early Christian Thought and the Classical Tradition. Studies in Justin, Clement, and Origen*, Oxford 1966). 104-105頁、参照。
- 4 同上、104-5頁、参照。チャドウィックは同時に、この著作が、主にグノーシス主義的・二元論および決定論について反論していることを指摘している。神学体系を提示することがこの書の目的ではなかったのである。

また、ここにおいて、オリゲネスは十分な議論を展開したのち、最終的な結論を読み手に委ねていることがある。(たとえば、PA II, 8, 5; II, 6, 7; II, 8, 8; III, 4, 5; III, 6, 9) その他、オリゲネスは、自分が完全には説明し切れていないことを示唆する「私の能力の限り述べたことで充分としよう」「今はこれで充分としよう」といった言葉を、章の最後に時折記している。(たとえば PA I, 2, 13; I, 7, 4; II, 4, 4; II, 10, 8 など多数)

さらに、「神のみが知っている」と、自分も含め、理解力が不十分なことを自覚した箇所もみられる。(PA I, 1, 9 [神について]); IV, 3, 15 [聖書理解の方法に関する聖書中の事例]) ただし、「…確実に知っているのかは、神のみであり、またキリストと聖霊によって神の友となった者のみである」と、人間もその可能性を有している発言も見られる。(PA, I, 6, 4 [終末について])

- 5 具体的にはマルキオン、ヴァレンティノス、バシレイデスらを指す。
- 6 Cf. PA III, 1, 8.
- 7 PA Prae, 10 (Görgemanns-Karpp, 98, 1-7 [16, 9-15]).
- 8 オリゲネスはここで、外的力から受ける影響を「運動」として捕えている。この例証は、『祈りについて』6, 1 においても、同様に用いられている。この論証方法は、ゲッセルをはじめ一般に指摘されるように、理性の根柢に関しては先験的なプラトンの立場において、また自由的・内的構造に関してはストアの立場による分析によって見出されたものと理解される。Cf. Gessel, W., *Die Theologie des Gebetes—nach >De Oratione< von Origenes*, München-Paderborn-Wien 1975, p. 157; Jackson, B. D., "Sources of Origen's Doctrine of Freedom", in: *CH* 35 (1966), pp. 16-21. チャドウィックは、オリゲネスがストア的理解(「人は外的な力に動かされたり邪魔されたりしないものに自己の願望を限定すべきである」)を受け入れるに吝かではないが、魂がそれ自体で道徳的不変性という本来の資質をもつとは考えず、むしろ、そのもろさと弱さをはるかに深く自覚していたことを指摘し、オリゲネスにとって魂のこの可変性は、恩寵によって神と合一せられる時にはじめて克服されるものであると述べている。(PA I, 7, 5; III, 5, 4; ComRom VII, 4; HomNum XXVIII, 2; チャドウィック、前掲書、153頁、参照。また、トリグは、この魂の可変性に倫理的責任があり、魂の選択した結果に責任を持たねばならないのだと理解している。Cf. Trigg, J.W., *ORIGEN The Bible and Philosophy in the Third-century Church*, Atlanta 1983, pp.

- 9 「生きてはいるが魂を持たず自動的に動くもの」 (“ἐξ ἑαυτῶν μὲν τὰ ἄψυχα” ; “ex se moveantur ea, quae vivunt quidem non tamen animantia sunt”): PA III, 1, 2 (Görgemanns-Karpp, 464, 10/27–11/28 [196, 12/29–13/30]). と換言されている。
- 10 「魂を有する自律的に動くもの」 (“ἀφ’ ἑαυτῶν δὲ τὰ ἔμψυχα” ; “a se autem moveri...animantia”): PA III, 1, 2 (Görgemanns-Karpp, 464, 11/27–28 [196, 13/29–30]). と換言されている。
- 11 トリグは、自由意志が「魂の選択能力」に根ざしていることを指摘している。Cf. Trigg, J.W., op. cit. Atlanta 1983, pp. 116–117.
- 12 Cf. Görgemanns-Karpp, 468/466, 2/33–468, 7/18 [198/197, 2/33–198, 2/18]. (οὐκ ἀγροητέον μέντοι γε ὅτι τὸ πλεόν τῆς εἰς πάντα τεταμένης φύσεως ποσῶς ἔστιν ἐν τοῖς ζῴοις, ἐπὶ τὸ πλεόν δὲ ἢ ἐπὶ τὸ ἔλαττον ὥστε ἐγγύς που εἶναι, ἴν’ οὕτως εἶπω, τοῦ λογικοῦ τὸ ἐν τοῖς ἔξωθεν κυσὶν ἔργον καὶ ἐν τοῖς πολεμικοῖς ἵπποις. τὸ μὲν οὖν ὑποπεσεῖν τόδε τι τῶν ἔξωθεν, φαντασίαν ἡμῖν κινεῖν τοιάνδε ἢ τοιάνδε, ὁμολογουμένως οὐκ ἔστι τῶν ἐφ’ ἡμῖν” : “Illud sane nequaquam latere nos debet, quod in nonnullis mutis animalibus ordinator quidam motus a ceteris animalibus invenitur, ut in sagacibus canibus vel bellatoribus equis, ita ut videantur aliquibus velut rationabili quodam et naturali motu, pro huiusmodi usibus largius indulto, fieri credendum est.”) ここにおいて、オリゲネスは「賢い」動物に関しても言及し、たとえその動物が秩序正しく行動しているように見えたとしても、それは「理性」によるものではないと述べている。
- 13 “anima” (f) ではなく、“animus” (m): PA III, 1, 4 (Görgemanns-Karpp, 468, 35 [198, 35]).
- 14 “Τὸ δὲ τούτων οὕτως ἡμῖν γινόμενων τὰ ἔξωθεν αἰτιάσθαι καὶ ἑαυτοὺς ἀπολύσαι ἐγκλήματος, ὁμοίους ἑαυτοὺς ἀποφηνάμενους ξύλοις καὶ λίθοις ἐλκυσθεῖν ὑπὸ τῶν ἔξωθεν αὐτὰ κινήσαντων, οὐκ ἀληθὲς οὐδὲ εὐγνώμον, βουλομένου τε λόγος ἔστιν ὁ τοιοῦτος τὴν ἔννοιαν τοῦ αὐτέξουσι παραχαράττειν.”: “Cum ergo haec ita esse naturalibus quodammodo testimoniis conprobetur, quomodo non superfluum est gestorum nostrorum causas ad ea, quae extrinsecus incidunt, restorqueri et a nobis culpam, in quibus omnis causa est, removeri, ...”; PA III, 1, 5 (Görgemanns-Karpp, 470, 12/32–472, 1/17 [199, 12/32–200, 2/17]).
- 15 “οὐκοῦν ὁ λόγος δείκνυσιν ὅτι τὰ μὲν ἔξωθεν, οὐκ ἐφ’ ἡμῖν ἔστι, τὸ δὲ οὕτως ἢ ἐναντίως χρῆσασθαι αὐτοῖς τὸν λόγον κριτὴν παραλαβόντα καὶ ἐξισταστὴν τοῦ πῶς δεῖ πρὸς τάδε τινα τῶν ἔξωθεν ἀπαντήσασθαι, ἔργον ἔστιν ἡμέτερον.”: “Consequentia igitur rationis ostendit quod ea quidem, quae ex trinsecus incidunt, in nostra potestate non sunt; bene vero vel male uti his, quae incidunt, ea ratione, quae intra nos est, discernente ac diiudicante quomodo his uti oporteat, nostrae est potestatis.”: PA III, 1, 5 (Görgemanns-Karpp, 474, 2/20–6/23 [201, 2/20–6/23]).
- 16 “οὕτως τὸ μὲν ἐνεργεῖν, ἢ ζῳά ἐσμεν, εἰλήφασμεν ἀπὸ τοῦ θεοῦ καὶ τὸ θέλειν ἐλάβομεν ἀπὸ τοῦ δημιουργοῦ, ἡμεῖς δὲ τῷ θέλειν ἢ ἐπὶ τοῖς καλλίστοις ἢ ἐπὶ τοῖς ἐναντίοις χρώμεθα...”: “Ita ergo est (et quod dicit apostolus quia) virtutem quidem voluntatis a deo accipimus, nos autem abtimur voluntate vel in bonis vel in malis desidiis.”: PA III, 1, 20 (Görgemanns-Karpp, 542, 5/20–8/22 [235, 5/20–8/22]).
- 17 Cf., Mt 5, 39; 5, 22; 5, 28.
- 18 “καὶ εἴ τινα ἄλλην διδώσιν ἐντολήν, φησὶν ὡς ἐφ’ ἡμῖν ὄντος τοῦ φυλάξαι τὰ προστεταγμένα, καὶ εὐλόγως ἐνόχων” ἡμῶν “τῇ κρίσει” ἐσομένων, εἰ παραβαί νομεν αὐτά.” ; “nisi quod in nostra potestate est observare posse quae mandantur, et propter hoc recte ‘rei’ efficitur ‘indocio’, si praevericemur ea, quae utique servare poteramus?”: PA III, 1, 6 (Görgemanns-Karpp, 476, 8/21–10/23 [202, 8/21–10/23]).
- 19 有賀鐵太郎『オリゲネス研究』(有賀鐵太郎著集 I)、創文社 1981年(長崎書店1943年の再版)、282頁、参照。
- 20 有賀鐵太郎、前掲書、267頁、参照。Cf. PA I, 2, 5.
- 21 Cf. PA I, 7, 5; PA III, 5, 4; ComRom VII, 4; HomNum XXVIII, 2. チャドウィック、前掲書、153頁、参照。
- 22 “Liberi namque arbitrii semper est anima, ...et libertas arbitrii vel ad bona semper vel ad mala movetur, nec umquam rationabilis sensus, id est mens vel anima, sine motu aliquo esse vel bono

- nel malo potest.": PA III, 3, 5 (Görgemanns-Karpp, 600, 3-6 [262, 9-12]).
- 23 "...ούτε τὸ ἐπ' ἡμῖν χωρὶς τῆς ἐπιστήμης τοῦ θεοῦ, οὔτε ἡ ἐπιστήμη τοῦ θεοῦ προκόπτειν ἡμῶς ἀνογκάζει,"; "..., id est, ut neque ea, quae in nostro arbitrio sunt, putemus sine adiutorio dei effici posse, neque ea, quae in dei manu sunt, putemus absque nostris actibus et studiis et proposito consummari": PA III, 1, 24 (Görgemanns-Karpp, 558, 10/23-11/25 [243, 10/23-1/25]).
- 24 "Evidens igitur ratio est quia, sicut in bonis rebus humanum propositum solum per se ipsum imperfectum est ad consummationem boni (adiutorio namque divino ad perfecta quaeque perducitur): ita etiam in contrariis initia quidem et velut quaedam semina peccatorum ab his rebus, quae in usu naturaliter habentur, accipimus;": PA III, 2, 2 (Görgemanns-Karpp, 568, 1-5 [247, 29-33]).
- 25 Cf. PA III, 2, 2.
- 26 Cf. PA III, 2, 3.
- 27 "A deo autem datur non ut sustineamus (alioquin nullum iam videretur esse certamen), sed 'ut sustinere possimus'. Ea autem virtute, quae nobis data est ut vincere possimus, secundum liberi arbitrii facultatem aut industrie utimur et vincimus, aut segniter et superamur.": PA III, 2, 3 (Görgemanns-Karpp, 572, 17-21 [250, 2-7]).
- 28 "Verum quoniam rationabiles ipsae creaturae, sicut frequenter ostendimus et in loco suo nihilominus ostendemus, arbitrii liberi facultate donatae sunt, libertas unumquemque voluntatis suae vel ad profectum per imitationem dei provocavit vel ad defectum per negligentiam traxit. Et haec extitit, sicut et antea iam diximus, inter rationabiles creaturas causa diversitatis, non ex conditoris voluntate vel iudicio originem trahens sed propriae libertatis arbitrio.": PA II, 9, 6 (Görgemanns-Karpp, 412, 13-20 [169, 28-170, 5]).
- 29 有賀は、この物質世界は神が訓練目的のために作ったものと理解しているが、そのように目的論的なこの世理解を、オリゲネス自身の理解として確認することはできない。むしろ、この世の創造の目的を、魂の「訓練」のみに限定することはオリゲネスの意図と一致しているとは思われない。有賀鐵太郎、前掲書、262頁、参照。
- 30 同上、268頁、参照。
- 31 Cf. PA III, 1, 22. たとえば、「神の知識を抜きにし、われわれの意志能力（ト・エフ・ヘーミー）だけではわれわれの進歩を必然ならしめない」との見解が見られる。有賀鐵太郎、前掲書、300頁、参照。
- 32 チャドウィック、前掲書、117頁、参照。
- 33 有賀鐵太郎も同様の指摘をし、すべて自意識と意志とを有する人格的存在というところに特徴を見出している。有賀鐵太郎、前掲書、260頁、参照。
- 34 Cf. PA II, 8, 3.
- 35 PA; ComJn 32, 18. オリゲネスが用いたこれらの用語、とくに「魂」(ψυχή)「精神」(νοῦς)「主導能力」(ἡγεμονικόν)については、拙論「オリゲネスの祈りにおける聖霊の参与—「聖なる者」のみに限定される意味について—」『神學研究』第46号、1999年、8-9頁、参照。
- 36 Cf. PA III, 3, 5. 有賀鐵太郎、前掲書、282頁、参照。
- 37 Cf. PA I, 8, 4. 有賀鐵太郎、前掲書、263頁、参照。
- 38 「体」に関して、プラトンは体(ソーマ)を魂(プシューケー)の牢獄(墓場=セーマ)であると理解し明らかに二元論を提示し、ギリシャ哲学の思考法を用いたオリゲネスにもしばしば善と悪とを対比させる二元論的傾向は否定できない。
- しかし、それにも関わらず、オリゲネスは体を「悪」とはしない。なぜなら、オリゲネスによれば神は善であり、ゆえに善なる神のわざもまたすべて善から生じた善なるものである。つまり、創造の原因の善悪を問うのであれば、体も含め、全ての存在物に関して、それが善から生じたと言わねばならない。
- また、神は非物質的な「存在の根底」であり、すべての存在するものの原因である。存在するということは、存在するところの者にあずかることであるから、あらゆる被造物は善なる存在なのである。
- 以上の点から考えると、有賀は「体を与えられたこの具体性こそが『虚無』である」(有賀鐵

太郎、前掲書、262頁)と述べているが、この場合の「虚無」が非存在を指すものであるなら、彼の論述は適切とは言えない。

ただここで、別のひとつの出来事に短く触れておきたい。それは、明確な信憑性は得られないが、彼が自ら体に傷を加え去勢したと伝えられている事柄に関してである。たとえその目的が、魂を幽閉する物資なる体を変化させることで、魂のよりよい状態を目指すことであったとしても、オリゲネスの行為そのものは、善なる体を自覚的に傷つけるということになる。

また、本論文の最初で述べたオリゲネスの自由意志に関する論述をここで再考すると、新たな矛盾が生じる。つまり、体は魂にとって外的環境であり、自らそのものではない。ゆえに、体からの影響を受けたとしても、魂に自由意志が存在するかぎり、魂はその外的な影響力とは無関係に行動し選択する能力を有しているはずであり、彼自身、それを自覚しているはずである。あるいは、それから逃れることができないと考えたのであろうか。父親に倣って殉教さえも厭わない姿からは、この推測は信頼性に乏しい。むしろ、この出来事が事実であるならば、オリゲネス自身のためというよりも、周囲の人々に対して、たとえ彼らが自由意志を有していようとそれは完全ではなく、その自覚もまたオリゲネスを超えるほどではなかったと考えられるため、そのような意味で、オリゲネスの配慮的な行為であったことは考え得る。彼らもまた自由意志を有してはいるが、誰もがそうであるように、弱さをも持ち合わせていたであろうからである。

しかし、その出来事の実性が曖昧である以上、この議論もまた推測の域を出ないため、ここにおいてこれ以上の展開は不必要と思われる。

- 39 チャドウィックは、「人間が『苦しみ』ともいべきこの地に置かれているのは、造物主(Maker)に復帰することを教育されるためである」(CC VII, 50:チャドウィック、前掲書、126頁)と説明しているが、オリゲネスに「苦しみ」の場」としてのこの世の理解を見出すことは厳密には困難である。
- 40 チャドウィック、前掲書、108頁、参照。これに関しては従来もしばしば指摘されてきた。Crouzel, H., tr. by Worrall, A. S., *ORIGEN*, Edinburgh 1985, tr. 1989, p. 87ff. に詳しい。また、ハウシルトもこれに人間の霊的な状態を説明するなかでこれについて言及し、魂がその精神と肉との中間に位置するのは、倫理との関連においても理解されていると述べている。Cf. Hauschild, W. -D. *Gottes Geist und der Mensch Studien zur frühchristlichen Pneumatologie*, München 1972, S. 95.
- 41 同上、121頁、参照。
- 42 体について、オリゲネスはいかに理解していたのか。有賀は、「体」が質料(ヒュレー)から作られたという理解がプラトンのことを指摘する一方、この質料が神によって作られたという点(PA II, 1, 4)は、ユスティノス同様にキリスト教的であると評価している。(有賀鐵太郎、前掲書、頁、参照。)オリゲネスにとって、物質そのものも悪ではない。ゆえに人間に付与される体もまた善なるものであると言える。この考え方は、ギリシャ哲学を援用したオリゲネスにとって特殊なものと言える。
- 43 "...filius dei...suscepit non solum corpus humanum, ut quidam putant, sed et animam, nostrarum quidem animarum similem per naturam, proposito vero et virtute similem sibi et talem...sola omnium animarum peccati incapax fuit,...": PA IV, 4, 4 (Görgemanns-Karpp, 792, 19-22 [353, 9-12]; 796, 2-3 [354, 14-15]).
- 44 "...participio filii dei quis in filios adoptatur..., ita et participio spiritus sancti sanctus et spiritalis efficitur." PA IV, 4, 5 (Görgemanns-Karpp, 800, 1-3 [356, 6-8]).
- 45 これに関しては、すでにブイエが言及している。ルイ・ブイエ著、大森正樹他訳『キリスト教神秘思想史1 教父と東方の霊性』、平凡社1996年(Bouyer, L., Leclerc, Vandenbroucke, F., Gognet, L., *Historie de la spiritualité chrétienne*, tomus 1-3, Paris 1960-65)、215頁、参照。
- 46 "in quo et manifeste divinae imaginis cognoscuntur indicia,...ab hominibus vero paulatim et singulae quaeque conquiruntur." PA IV, 4, 10 (Görgemanns-Karpp, 818, 10-11 [363, 19-20]; 818, 19-20 [363, 28-29]).
- 47 Cf. CC IV, 30; PE XXVII, 2; ComJn XX, 17. 有賀鐵太郎、前掲書、279頁、参照。
- 48 PE 10. 2.